

三才の巻

所住の巻

目次

今日世雄住諸佛所住……………	一	人生の煩悶は如来の恩寵……………	二一
佛陀凡位の苦悶……………	二	苦惱と罪惡の苦悶……………	二三
生死解脱の求道……………	六	歸命……………	二五
佛陀諸佛所住の安樂地を得給ふ……………	八	融合……………	三二
衆生の顛倒……………	一一	安住……………	三五
顛倒より醒て絶待の安住を求む……………	一六	情操……………	三七
光明主義の四諦……………	一九		

今日世雄住諸佛所住

此段は世の大雄者佛陀は常恒に究竟常住の安穩の處に在して顛倒苦惱の衆生を誘引して自己の心情の安住する處に任せしめ給ふ。衆生は生得顛倒の想を以て安樂を覓めんと欲して却て憂惱の因を爲り、心の爲に走使せられて安き時なし。佛陀は顛倒を離れて諸佛と共に彌陀の涅槃光明裡に安住し給ふが故に常恒に安穩なり。

人の精神中憂悲苦惱恐怖驚愕等喜怒哀樂等は感情である。人は理としてはさまで憂慮苦悶すべき因縁なきにも拘はらず感情は自ら安すること能はざるあり。人類の感情に苦悶性あるは宗教を要求する原因である。若し佛陀の教に本づき念佛三昧を以て彌陀の光明に依つて心機一轉する時は初めて彌陀の中に安住して諸佛と同じく大安穩に住することを得る。

世雄佛陀

有爲轉變の世三界火宅の中に栖居して眞に安心の得らるゝ筈はない。其中に在り乍ら泰然として安心して在るに二類あり。一者法華の譬喩品に説く如く、古朽たる大夏に片隅の方より火が燃あがり、内に頑是なき小兒は噉味にして只遊戯れ遊びて身の焼るゝを知らずして安氣に戯れて居る如き世の薄智愚昧の人々。二は已に身は三界に在り乍ら三界の煩悩を盡して精神が諸佛と共に彌陀の中即ち涅槃常樂に安住する人である。

初の愚昧の凡夫は顛倒して未だ現在自己の苦惱を自覺せざる故に安氣なるも、一朝己身に火の燃うつる時は忽ちに悲泣悶絶して狂ひ悶ゆるに至る。已に精神的に自己の顛倒を覺つて眞實に彌陀涅槃界に安住する聖者は假令此形軀の上に何なる事情あらうとも憂悲苦惱なくして如来の中に安住して眞實に大安穩を得らる。

佛陀の聖心が如何なる境遇に對しても情毫も動じ給はず常恒に平和安穩に在したるは諸佛所住たる彌陀の中に自己の感情を置き給ふが故なり。提婆が木槍の難にも慈悲屈魔が刀を以て殺害せんとするに臨んでも毫も心動じ給はず世の中の八風の爲に心動じ給はず。常住安穩。

世の英雄豪傑は何に偉大なるも喜怒哀樂の感情にはもろくも崩さるゝ憂あり。經に天帝釋も女色の爲に勝つこと能はずと。高く三界の上に出て深く諸佛の所住なる彌陀大我の中心の奥が常樂我淨の華匂ふ處に自然無爲の安樂を感ずる故に、低き娑婆の五欲の爲に心動じ給はず。

佛陀凡位の苦悶

釋尊は已に成道の後には、感情が彌陀の中に極樂涅槃城に在ます故に常住安穩なれども、未だ王宮に在して太子の時には生死問題の爲に非常に煩悶し給ひし如し。先き太子降誕の時仙人阿私陀は王の請により太子の相をみて涕泣して良久して白く、偉哉太子の聖容明かに三十二相を具し給ふ。是凡人にまします、若し俗に在らば必ず轉

輪王と成つて四天下を統御し給ふべく、出家し給はば一切種智を得て天人の師と成り給はん。實に億劫にも遇ひがたき聖者の出世に値ひ乍ら我既に年老ひ此大導師に就いて親く法を聞き得道を得ること能ざるは實に千古の遺憾なりと歎す。王之を聞き一は喜び一は悲む。常に意を用ひ給ひて出家の志を防ぎ、太子をして願くば轉輪王として五天を御せしめんと欲し、夫のみを王之望とし給へり。爾來父王は此一事を以て常に憂とする處、王謂らく太子の出家の志を奪ふは唯太子をして世の快樂を以て満足せしむるの道あるのみと、王はいかにして太子の爲に娛樂機關を備へんと、或は三時殿を建て花林華池樓閣春秋其居を秩して四時の娛樂に飽かしめ、又國中より有ゆる美女を選みて嫁女として常侍せしめる等、一國の富と力を竭して太子の心情を奪はんとす。

太子十七歳の時に王は善覺王の王女耶輸陀羅姫を聘して妃と爲し、數多の美姫を左右に侍せしめ長夜歌舞管絃は太子の宮殿に演奏せらる。

愆の如き天上の樂苑を現はせる色味の問も太子が心中に萌したる人生の疑問はいかなる誘惑も之を取除くべくもあらず。四門の遊びに深く印象したる老病死の世の無常の觀念は片時も胸中に横りて離るべくもあらず。

美姫らが管絃歌舞を以て太子の誘はんとすれども却て太子の出家の志を増長するの助縁となるのみ。いかにとなれば彼らは今陽春桃李一旦の花も夕に散果るの果敢きを自から知らず。若し我れ疾く生死解脱の道を悟りて憐むべき彼らを度せずば誰か之を度すべきぞ。

太子は深宮に在て旦暮に唯人生生死問題に心を煩はし思を悶し憂慮惜くべくもあらず。自から(一)に忍びず一日卒然と父王の前に出で出家の志を述べ。父王驚きてのたまはく、汝出家成道して一切衆生を濟度せんよりは先づ今此父の苦悶を救へよと。我疾く位を汝に譲りて後梵行を修せん。是我夙に願ふ處なりと。いかに父の切なる言をも太子の志は遂に止むること能はざりき。

生死解脱の求道

人生問題に悶える太子は父王に對して若し不老と不病と不死と不愛別離との四願をだに叶ひ給はば我願は満足せりと。父王此願の如きは何人とも得べきにあらず。得へからざる望を止めて現に人生の幸福を享受するに如ざらんと曰ひしも、求道の志深き太子は世の榮華は半銭の價値なき、唯求むる處は生死解脱の道のみ。竟に朧月八日の中夜に私かに王宮を忍び出で東の方阿跋彌河の深林に入り此處にて自ら鬚髮を剃除し珍妙の衣を捨て法衣を身に着け更に進んで跋伽仙を訪ひ、彼は苦行波羅門なれば或は食を斷ち荆棘に起臥し火に入り水に投じ有ゆる肉體を苦しむ。之を以て未來天上の樂果を得んが爲なりと。太子謂らく彼は苦行を以て樂果を求む。諸天樂ありと雖ども福報盡くる時は六道に輪廻の苦報免れず。是究竟の道に非ずと。終に去りて后アラ、仙を問ふ。此仙の非々想處を究竟とするも其非々想は我ありとせんか。我あれば知あり。若知なくば木石に同じ。若知あらば樂縁あり。染着あり。是究竟解脱にあらずとて、獨り伽耶の道場地に入り菩提樹下に於て金剛座に柔鞞草を敷いて結跏趺坐し給ふ。我一切智を得て生死の苦を解脱せずば此座を起たじと誓ひ給ふ。時に菩薩の一心は魔の宮殿を動す。魔王憂懼し若し淨飯王子成道せば必ず我境界を侵さん。何の方便を以て彼が大道心を傾動せんと。舍那衣を被け化して小使者の形と變じ、勿卒として菩薩の前に跪きて告上る。君何にして自から安んじて此に住し給ふ。劫比羅城に提婆王子恣に後宮嫁女を染汚し諸の釋種を謀殺す。菩薩之を聞き給ひ耶輸陀羅等を憐れみ、提婆達多の惡意をば何にして調伏せんと思惟し給ふに、又忽ち念じ給はく我今此座に坐す、何ぞ斯の如き俗情の發りけんと思する時、初めて是魔の所爲なることを知り給ふ。又魔王三女の其容貌艶麗にして天上中に無比なるを使はして人を誘惑するの巧妙彼ら三女有ゆる媚をつくし種々に媚諂ひて菩薩を惑さんと欲するも、菩薩毫も動じ給はず。ついに降伏しまた大魔王が十八億の軍勢を率ひ有ゆる天動地動の勢を以て

菩薩を或は猛帥となり虎狼惡魔となり毒咽を吐き百千の雷電を敲して太子の静定を妨ぐれども、金剛の心は動じ給はず。

靈に復活せざれば究竟眞實の安穩處得べからず。斯一大關門を貫徹すること大事なり。斯關門を貫徹するに非ざれば何の處にか火宅の憂を免るべき。

佛陀諸佛所住の安樂地を得給ふ

佛陀菩薩の滿位十魔を降伏し正覺を成せんとするに先だち、前正覺山てふ山に登りてこゝにて正覺を成せんと、金剛の志を發し給ふに足地に没して地も菩薩の足を載すに堪えざる如し。時に空中聲あり。世に二種の人あり。地も載すこと能はず。一は五逆罪人、五逆悉く犯したる時大地裂て無間地獄に墮す。一は一切智を得、無上覺を得る時、今菩薩は無上覺をうる時至れり。禪河の邊菩提樹の下に過去諸佛の成道し給ふ金剛座あり。此に詣りて正覺を成じ給へと。菩薩は此を去て道場に行き給ふに吉祥なる柔輦草を石上に敷くに、之を哀んで樹下に踟躕して坐し給ふ。此金剛心を以て人間の中心眞髓なる肉の吾を滅殺して靈の人即ち佛と爲り、有爲の娑婆に依屬する身が諸佛所在の涅槃に安住する情操の轉換せんとする際なれば從前の我に屬する感情の中心、過去未來を想ひ、從來久しく個體の主宰と爲り來りし吾我が亡びんとするに先だち、太子の胸裡、何を苦悶なからん焉んぞ肉の五陰魔煩惱魔と外の天魔等を胸中に百出して太子を襲ひ侵さんとす。太子奮然として大不動の金剛心を以て胸中の惡魔を叱咤し、中夜初更を過る頃、大智眼を開き横に十方を洞觀し堅に三世に貫徹し、正覺の旭宇東天に輝き、靈的乾坤顯現し來る時、無始已來の妄象は影を失ひ、已に妄我亡びぬれば、妄我に屬する一切の顛倒、肉の幸福主義、人生は肉の快樂を目的の如くに執着したりし煩惱も姿を變じ、恰も闇夜に畏ろしかりし人影も白晝に照し見れば案山子たるが如く、一切憂悲苦惱の源、亡び世界依屬の心は轉じて絕對涅槃、即ち有爲轉變の立脚地を超えて絕對無爲の境に入れり。之を小乘教は主觀客觀も兩界を超絶

したる眞空無爲の涅槃界とす。之を得得するが故に憂悲苦惱を離れ、已に相待規定の世界依屬の心を離るれば、已に生死の恐もなく、即ち我を無にすれば凡ての苦樂を超えて、無爲自然の安穩地に到る。シヨベンハウエルが謂ゆる人は意識有る故に憂悲苦惱あり、無意識なれば之を感ずることなしとの如くにして、凡て幸福を貪らざる榮花を求めず一切の世界動機の名譽權利財產等の欲を離るれば平和なり安穩なり。無爲眞空の涅槃常住の平和をうるには、小乘教は生死又一切の恐怖を離れて安穩地を得るものとす。消極的である。圓滿なる大乘教は積極的にして釋尊が菩提道場にて正覺を成じて七日間華嚴三昧に入て蓮華藏世界大盧遮那の大我身大自在身常樂我淨四德莊嚴の華藏界に自受法樂をうけ、一切法身菩薩の爲に他受用法樂を施す。之を常住の大涅槃界といふ、一切諸佛十佛の自境界ともいひ、自受法樂の都ともいふ。

是即ち生死を超えたる無量壽極樂界なり。佛陀は假令身は生死界に在れども神は常に常樂の涅槃界に住し給ふ。こゝを諸佛の所住處とす。生死を離れたる絕對の靈界なり。無量光明界なり。只光榮と幸福とのみの境界なり。精神がここに到りて初めて眞の常住の平和永恒の生命を得るなり。人生を只因縁因果に規定せられたる世界に絕對に依屬して肉の幸福を人生の目的とする間は、決して眞の平和と安心は得べくもあらず。肉體已上の心靈に相待規定の世界已上の絕對なる如來の中に超入して初めて眞實の平和を得らる。釋尊も初めに深く人生生死問題に煩悶し、遂に菩提道場に於て自我を亡じ、有爲の世界を超え絶對なる如來大我の中に永遠の生命と常住の平和を發見し、常に自ら精神はそこに安住し給ひて、すべての衆生を自己の安住し給ふ處に誘引し給ふ。故に世界の何なる出來事に對しても心動じ給はず。大雄として諸佛の所住に安住し給ふ。

是より我ら衆生は何故に憂悲苦惱に襲はれ眞實に平和と常住の安心が得られぬか、また何にせば世雄の安住し給ふ處に安住することを得らるべきかを明さんとす。

衆生の顛倒

一一

幸福主義と世界依屬とは衆生を苦悶する原因なり。全體人類は他の動物と同じ動物欲と進んで主我的の欲を有つてを。人は生得に肉體を以て飽く迄に幸福を追ひ求め人生は快樂を目的として生れ来た如くに謂つてを。之を佛は衆生は本來人生樂くないものに樂を貪る性を樂顛倒と云ふ。生つきまぢがつて居るを根本的に謬つてをると教へ給へり。人の肉體は快樂を享樂すべき器具にして現世界は快樂をうくべき舞臺と想ひ飽くまで形の幸福を追求めて止まぬ。然るに幸福は貪れば貪るほど得難し。凡夫が常に前途に快樂を熱望して接近して見れば眞の價値は得難く、噓を以て渴きたる鹿が遠隔の地に陽炎を見て水ありと想ひ接近して見れば實に水にあらざるが如し。肉の快樂を追求める凡夫の鹿の如くにして、之は貪るに隨つて只不満と不足を感ずるのみ。若し人生の眞理を自覺せざる者衆生相共に闇黒の中に己のみを厚せんとして、自覺せざる衆生は八苦に逼らる。八苦とは生、老、病、死、愛別離苦、怨憎會苦、五陰盛苦、求不得苦とである。先づ第一生の苦。生存競争の苦、相互競争場裏にある相を經に、世の人民より蠕動の類に至るまで動物共通の惡は生れ乍ら有つてを。衆惡を爲さんと欲し皆然らざるはない。強きは弱きを伏し轉た相尅賊し殘害殺戮して迭に相呑噬し。己が力の及ぶ限りは呑噉んと欲す。此競争は一切階級に通じて同じく然り。鼠は猫に噉まれ、猫は犬に殺され、勞働者の膏血を絞つて富豪の膳に供し、其形に於てこそ差あれ、相呑噬すると云ふ意味に於て相異ならず、其富豪者と雖ども精神に入つて見れば經に示し給ふ如く、世人此劇惡の中に於て勤身勞務して白から給濟す。尊も卑も富るも貧きも少長男女共に錢財の爲に憂思適に等し。屏營として愁苦して念を累わ慮を積み心の爲に走使せられて安き時あること無し。田あれば田を憂ひ宅あれば宅を憂ひ、乃至一切衣食什物資具類に至るまで、之が爲に憂慮せざるはない。憂念恐怖する内に、若も非常の水火盜賊また怨家債主の爲に焚漂劫奪せられ、消散磨滅の曉に

一二

は、憂毒胸中に松々として憤を心中に結び、心に堅く結ばれて解くる時あることなしと。經に相互親怨常なく人情の頼み難きを、世間人民父子兄弟親屬等が相ひ敬愛し合て互に憎嫉すること無き、金錢等も有無融通して貪惜を得ず、言色共に和して相違戻することない。然れども一朝情に逆ふ時は忽ち心諍ひて悲怒するあれば、今世の恨が後には劇く大怨と爲るに至ると。愛別離の相を經に、或は父子の爲に泣き或は兄弟夫婦更相に哭泣す。一は死し一は生じて更に哀感し、恩愛の情恐ひ難く、憂念結縛し、相願戀し年月をふれども心に開明せず。情欲を離れず。昏朦閉塞して愚惑に覆はれると。また世の人は闇黒の中に埋没する痴漢を感れみ、人生自ら熟ら思ひ計つて心端正に專精に道を行じ世事を決斷すること能はず、便々として可惜年壽を盡し、幾年経れども道を得ることなく、總猥慣擾して愛欲を貪り、道に惑ふ者は衆く、之を悟る者は寡し。世間忽々として膠頼すべきなし。高卑上下の別なく各々殺毒を懷き惡氣竊冥にして妄に事を興さんとす。天地に逆違し人心に順はず、自然の惡非先づ隨て之に與す。恣に所爲を聽して罪の極りを待つこと。

また人生の光明に接せず、如來の中に安住することなく顛倒の中に世界の榮華に憐がれつ、も世界は彼らが満足を與へぬ。身老れば身體の生活機關も老朽し憔悴し四大哀損し四支は自由を缺のみにあらず、前途の希望も閉塞せられ、世間にも疎外せられ、或はまた病痾の爲に呻吟し疼痛になやむのみにあらず、前途を悲觀し希望は挫折せられ種々の苦悶は競ひ起る。死を求むも得ず、生を求むるも得ざるなり。世に在りて順境に在れば榮花に甘ひ榮耀に誇り自ら得たりとし他を輕しめ專精に道を求めず。事蹉跌して逆境に陥らば忽ち落膽失神世を恨み佗を咎め只悲觀冥没して生き乍ら神は惡道に沈淪して自ら獨り闇より闇に迷ふのみ。世人誰も敢て代るものなく、世界の規定は毫も彼らに特典を與へぬ。年命は暫らくも停らぬ。翠袋の髪は忽ちに蒼白と變じ紅顏何時か白骨と爲る。

人生を顛倒して幸福主義世界を快樂の舞臺と誤解したる人生の末路實に哀むべし。

一四

一五

顛倒より醒めて絶對の安住を求む

佛陀の教ふる所に隨がひ、人は生得樂顛倒に墮せり。元來此身體は快樂の器具にあらず。此世界は肉の幸福を興ふる舞臺に非ず。之に於て宗教に依つて此顛倒より醒めて眞面目に安心の常住の安心を求む。人生は高等なる目的あり。世界には吾人を永生に入るべき手段の修行の道場と自覺し來る時に、初めて樂顛倒を脱し從來の世界依屬心を轉じて絶對に依屬する安心を起す。

若し天台の教に依れば、凡夫の顛倒より醒めて永遠の安心を得るに四教(四階)あり藏教、通教、別教、四教。

若し藏教によれば生滅の四諦と云つて凡夫の生死の苦は實に苦である。生死の苦の因は集と云ひ、凡夫の生れ乍ら有つてをる罪惡の源なる煩惱である。此煩惱を斷するには生死は苦であることを認めて苦の因の煩惱を斷する。生死を超たる處に眞實常住の涅槃の常樂あり。此常樂に到達するには三十七道品の道を修めなくてはならぬ。此道を修すれば必ず真空の涅槃を得て初めて安心できると。

次に通教によれば、無生の四諦と云ひ、凡夫の生老病死の苦と云ふも凡夫が迷て苦と感ずもの、實は夢幻の如な物で、悟つて見れば生死の苦と曰ひ涅槃の樂と云ひ何れも昨夜の夢の如なので、凡夫の夢の中に苦と想ひ醒めて見れば苦もなくまた樂もな

いと覺るのが通教の四諦。

別教は無量の四諦。是教は更に高尚で遠大で、苦にも無量あり。地獄より佛界に至る因果同じからず。集即ち苦の因なる煩惱も無量である。無邊の煩惱誓つて斷すべきである。道にも無量恒沙の佛法あり。法門無盡誓つて學知すべきである。滅に無量無上の佛果悉く證すべきである。

四教は無作の四諦。佛の眞實の覺より見れば、今此五陰の身も心も見ゆる眼も見ゆる

物も實は悉く眞如の現れである。して見れば生死の苦と云ふもない實は眞如から因縁に隨つて出沒變化する、眞如が縁に隨つてかはる迄のこと故に、苦と云ても本眞如なれば捨つべきものでない。無明と云ひ煩惱と云ひ實は是體は菩提と云ふ覺りなので、また目覺ないから煩惱として居るけれども、煩惱が覺て見れば此心が即ち覺りなのである。故に此心を斷切て仕舞へば覺の心が失る。故に逸邪皆中、正なれば、道の修すべきはなし。斷見とか常見とか云ふも見の心の本が實には中道なので正見であるから道を修して出来るものでない。道の眞理は本々まきまつて居るものである。生死即涅槃なれば滅の證すべきなしと。生と死との本體は生でも死でもない。本來常住の涅槃から出沒してをる故に、寂滅として別に證すべきものでないと、かやうに生死の本源に覺入つて見れば、其本體は絶對平等の如來法身を離れてない。其本體を知らず凡夫の迷の眼から皮表から種々に見てをるのである。

光明主義の四諦

圓教の無作の四諦の理は先に述べた。凡夫が佛に成ると云ふも其實は本々無作の三身が自己に具有つてをるのを佛法の修行にて顯はすまでのこと。寶石に本來具有をる光を琢磨して發するので、本自己に無きものを更に造り出すのでない。永恒の生命なる涅槃の性も本自己の本性に伏在してをるのを顯はれるまでの程は生死の苦と感じてをる。若し自己の奥底の絶對の生命が顯れれば生死の體が實は涅槃である故に恐るべき生死も無しと悟る。處で若し全くこゝに至れば諸佛の住し給ふ所に安住するのである。今光明の四諦にて、我が感情は生に惱み、死に苦しみ、すべてに憂悲苦悶の凡夫が、いかにして分に安穩の心に住す處が得られやう。吾人は自己の生死の源を悟ることはできぬ。然れども彌陀を信する處に自ら生死の凡夫が煩惱具足のまゝに彌陀大光明中に安住することが得らるゝ。大光明中とは即ち涅槃界、光榮と靈福とに満

さるゝ處である。

實を勉して云はゞ、我らが人生に生死の苦を感ずるに至ればそれは如來の恩寵である。此煩悶は我ら愚なる衆生に永遠の安樂の要求を催す警告である。例へば身體の局部に創傷にて出血する時は忽ちに痛苦を感ず。此痛苦の警告なかりせば創傷より多量に出血して甚しきは生命をも危害に及ぼすに至る。痛苦を感じて初めて創傷の治療をうくるに至るは是痛苦は自然が生物の生命保護の警告である如し。吾人の宗教心に於ても亦然り。若し生死の苦を感じず警告なからば、吾人の愚昧なる如來の靈力を信賴して永遠常樂を要求するの眞理を諦信する由なし。我らは頑是なき小兒なり。如來てふ大慈父によりして自己の生死憂悲苦惱の肉我を脱して新しき靈の生命に復活する心が決して自らは發るものでない。それを慈父の光明中に眞實の安心を得せしめんとするの慈父の恩寵である。

吾人が天性の朴素なる肉の快樂主義に耽着して、自ら覺りて生死本涅槃の理を悟るべくもあらず。依つて生活の難、死の懼、種々生理的の恐怖憂悲を感せしめて、初めて如來の光明を求むに至る。如來の光明に依りて信心覺醒して初めて眞實の安穩が得らるゝ。眞實の安穩は肉の上に求むべきに非ずして精神的に求むべきの眞理なるを識るに至る。實は現實界は我らが肉體の要求する幸福を満足させる舞臺にあらず。生得の肉の幸福主義の顛倒なるを自覺すると共に、此世界依歸の眞理に非るを知り、絶對的に依屬すべき如來に歸命信賴す。

人生の煩悶は如來の恩寵

人生否生死問題に就て煩悶が發るに至らば是即ち如來より我等衆生なる子らに對する慈悲である。是宗教を要求せしむる自然の豫備である。人間已下の動物は暫措き人類即ち頭腦の發達したる生物では、精神に於て心機一轉すべき機會を與ふべき準備として、人生の歸趣に對する生死問題に對する天より一の謎がかけらるゝ。曰く、我人

生は何を目的として活るものなりや。一個の飯袋子を保存する爲に慙く齟齬として此活路を取るべき爲なる乎。人生愆の如き價值低き物なり哉。實に此謎に對しては教祖釋尊さへも凡位太子たりし時に痛く頭腦を悩まされし諷がある。此人生の謎は天の慈父より子らに對する試である。此謎の解決が人生の價値を定むる定木である。可惜青年時代に唯肉の快樂を以て主義とし口腹の欲を恣にし青春の血を只動物慾に漲し肉欲を満足して自ら足れりとなすが如き族は、人生行路を闇黒に向つて居る動物の行路に墮落せる輩である。此に於て百尺竿頭に一歩を進めて教祖の太子たりし時の如き肉の幸福を顧るの暇なく、蒼天無窮の中に永遠の光明を發見せんとして、金剛の意志を以て突進せんとする大人志幹の志こそは實に絶對的の安住處に趣向する士である。青春の血に漲るべき胸の奥底に潜在する最も堅く密封せるあり。之の寶篋を開く爲に自己のすべてを犠牲にせんか、漲る青血の中に肉の快樂を以て満足とせんか。是人生が光明と闇黒とに分るゝ分岐點である。

苦惱と罪惡の苦悶

感情の信仰に我らが佛陀が安住し給ふ處に安住せざれば眞實の安穩は得られぬ。其安穩處に到らんに二の關門を貫徹せねばならぬ。一には人生の苦惱、二に自己の罪惡の苦悶である。天然の人は自然に人生脱却せねばならぬ動物性から人間に進みし或る垢質を有つておる。生の恐れ、死の怖れ、何となく種々の煩悶が胸中に交々起る。先に述し一には人は幸福追求の自然の欲望に世は之が満足と與へぬ。即ち求不得苦すべての苦は先に述べし如く逆も此満足は得べき理なく是實は自己の顛倒なるを覺り、次に全體斯の如きの苦の原因は即ち罪惡の源自己胸中に横はる煩悶が原因である。病患の苦痛は即ち病である。病治せば苦痛は闇を除く如く之が謂ゆる苦を知る。苦の本

たる煩惱を除くのである。人生は自から怖るべき爆裂彈を抱いてをる間は安心得がたし、自己胸中より勃興する煩惱即ち肉の我がから發動する罪惡の原動力が自己に伏在す謂ゆる貪瞋痴の煩惱、己が情に契はざれば忽に憤怒し、我情に契へば貪愛を起し、嫉忌忿恨等の種々の弱點が、悉く聚合して自己の胸中に伏在す。機會に應じて競ひ起る。然るに亦外界には煩惱を誘導する機會が世に充滿し、酒肆娼樓等の誘惑また、憤怒を起させる等の種々の機會は世に在りて、自己の胸中の惡魔と外界の誘惑とは之を脱却せんと欲するも自己の力の及ばざる處、止めんやめんとすれば益起り、犯すまじくとすれば彌々盛なるは、即ち肉に伏在する煩惱魔である。之を脱却せんにも力の及ばざる處、さればとて終身が奴隸と成り永遠に闇黒に墮落することは奥底の我の許すと能はざるところ。

自己の力の弱き、世界の頼にならぬことを自覺して之が非常の苦悶となりて初めて眞實の信仰心が起る。實は此煩悶こそは如來の恩寵である。此煩悶が眞實に自己の無力を認めて絶對なる如來に歸命信賴する動機である。

焉に於いて自己惡罪の煩悶甚深なる懊惱あり血と涙とを以て佛前に罪業懺悔の因となり、甚深悲痛なる懺悔の筈には自己の生命を犠けても如來の光明獲得を仰ぐに至る。自己を犠けて分に罪惡の我より脱し、如來の慈悲に罪業の凝固も融解して、靈き我に復活して、暖なる恩寵の懷に育てられ、畢竟常樂の安穩なる状態に至る迄の信仰に三階あり。一に歸命。二に融合。三に安住。

歸命——感情の信仰

現に我は苦惱の本は全く自己の罪惡である。此罪惡と云ふものも自己の胸中の煩惱は生得我に具りて、逆も我力にて除くことは不可能である。此解脱は容易でない。實に煩惱深うして底なく、業障深重なるを反照すれば、懺悔の信念彌々激却し來る。佛陀の親化に預りて罪障甚深の懺悔より佛陀の教に隨がひ、現に彌陀の光明によりて

靈に復活されし韋提希夫人の懺悔と、佛陀に哀を求めて歸命信賴せし觀經の因縁に此心狀を能く現はせり。夫人は曾つては摩伽陀一國の國母、沙羅大王の正后として身を珠籠深き宮中に榮花の春閑に榮耀の秋涼しき九重の憂世の辛き風はまだ曾て觸れしことなく、八苦の婆娑とはよそごと聞き給ひしならん。其故は國王は徳厚くして國家平穩に、加之、佛法を以て民心を修まれば錦上更に花を添へし太平の海靜かに正法の風徐ろに來る。上下共に良風の香薫を四方に流したれば、其國主たる夫人なれば謂へらく人界ほど幸福なるはあらず、生々人身を受け世々三寶に値はんと常に佛陀に隨つて、五戒を受け八齋戒を奉持せるも、然し、人界は全く不夜の世にあらず。人生に闇黒面なきを得んや。昨日の好天氣今日の大暴風と變ず。人界を襲ふ氣壓は九重の奥深き夫人の身上に壓し來れり。そは佗ならず。曾つては賢明の太子孝順なる嗣子と稱へられたる太子の阿闍世も、邪見逆惡の提婆調達の奸智と執拗なる誘惑には質朴なる太子端なくも動かされ、世にも有るまじき恐ろしき逆意こそ發したれ。父王を執へて七重の室内に幽閉し堅く門戸を閉し、守門を以て警守せしめ膳食を絶つて父王を殺害せんとす。夫人は如何にも之を救ふに道なく密に身に麝香を塗り璣珞の中に菩提漿を盛つて大王に上りしも、夫人の密贈はやがて太子の知る處と爲り、太子は大に激怒して既に利劍を執つて一刀の下に母の夫人を害せんと爲したまふ。幸にも二の侍臣の忠實なる諫言に依りて辛くも白刃の下は免れたれ、更に父大王に食物を贈ることを防禦せんがために、内官に勅して夫人をば深宮に幽閉せられて再び大王の許に往くことは退絶せられた。夫人が已に幽閉せられた後の心情はいかに憂愁憔悴して自ら安んずる能はず、仰いで天的なく俯して地に依り處なく天聞く地黒く何に向つてか此慘過を免れん。誰に向つてかこの悲慘をのべん。只靈山に在ます恩師釋迦如來に依つて慰安を求むる外に我此悲嘆は解くる道なし。思はずも靈山の方に向つて悲泣雨涙して、願くば世尊よ我が爲に阿難目蓮尊者をして我を慰安を與へ給へと禮念し上れば靈山に在ます世尊は韋提の心の所念を知り給ひて、目蓮阿難の兩弟子に勅して二人を

侍して靈山に没し給へば忽ちに王宮に現じ給ふ。時に韋提希は禮し已つて、世尊釋迦如來の身は眞金色にして百寶蓮花に坐し兩弟子の左右に侍し梵釋等の諸天は空中に在つて善ねく天花を雨してもつて供養する聖相を瞻み上りて何とも恐懼惜く能はず、自ら瓔珞を絶ちて、身を地に投じて號泣して佛に向つて白して言さく、世尊よ、我昔何の罪ありてか我がこの惡き子を生める。世尊よ、また何らの因縁ありてか提婆達多を眷屬と爲し給ひしぞ。唯願くは世尊よ、我が爲に畢竟安心の處を教へ給へと。

斯一節が即ち從來依屬し來たる世とまた自己との實に頼みにならぬことを感じ、自己の悲惡を自覺して畢竟の依屬すべき物を世尊に教給へと、すべてを獻げて佛陀に請願せし處に歸命の感情全幅を投じたるなり。夫人が會ては人界ほど目で度はなし。此人身ほど幸なるはなしと思ひ込みたる感情は、此境遇の爲に俄然として崩壊せられた現實の身は罪障深重にして現實の世は絶對的に依屬すべき處に非ずと自覺せられたるべき己が罪障、厭ふべきは娑婆憂惱恐怖の充滿せる世と認めてホト／＼厭忌の情が禁じ難かつた。夫人は自己の苦惱と罪惡の深甚なるを認めて厭忌して救を仰げどもまた何なる偉大なる靈格に歸命信賴せば此苦悶の中から救はれて永遠の安穩得られやうかは自ら知ること能はぬ。故に至誠に教を仰がれた。此が即ち感情を以て深甚の悲痛の懺悔と歸命の感情である。

歸命

韋提希は此濁惡の娑婆は苦惱と憂怖と充滿し不善のみ衆多し。願くは憐る恐しき惡人を見ず惡聲を聞かぬ情き處を示して給へ。自己の凡べてを獻げて全身全幅を犠けて歸命信賴の心狀を導師が韋提希に寄せて述べられた。

夫人真心徹到して苦の娑婆を厭ひ、樂の無爲を欣ふて永く常樂に歸することを明す。但し無爲の境には輕爾として階むべからず、苦惱の娑婆は軌然として離るゝに由なし金剛の志を發すに非るよりは永く生死の元を絶んや。若し親しく慈愛に従はずんば

何ぞ能く斯長歎を免れんと。

此文に能く歸命の情を寫し出せり。若し情の信仰を三位にして見れば、初歸命とは自分を顧みれば罪惡深重の凡夫闇黒に墮するの外に道なし。歸命信賴せんとする如來は遠く大にして其懸隔は甚し。憐る罪惡深き吾を如來は容れ給ふ哉。如來は甚深幽玄にして、唯一切諸佛も悉く彌陀を稱揚讚歎する、遠く名稱のみを聞いて高きみ空遙かに憐るゝも、業障の雲深くして神聖無上の威權者に對して近づき難し。されど釋尊の勸めに依れば久遠劫のミオヤと聞けば内心自づと親に對する親密な感情に如來を戀慕の情は起る。其若しも大悲攝取の御手に攝められて永劫の沈没を免るゝを思ふ時は、たとひ身命を捨てても如來にすがらざるを得ぬ。我ら無始已來孤獨につめたき凡夫、如來大慈悲の懷に暖めらるゝに非れば靈の生命は復活し難し。靈の命の活きるにあらざれば父子永劫に遇ふこと難し。彌々彌陀を戀ひしく彌々如來を慕しくなる。然れども業障の間は除き難く煩惱の雲常に胸に横はり未だ如來に接せざる間は最熱心なる感情となる。

例へば男女の間に於る戀愛者に對して、未だ逢阪の關のゆるされぬ程は感情的に熱烈にして、詩經に窈窕たる淑女は寤寐に之を思ふ、之をおもふて得ざれば展轉反覆すと云ふ如くに、此婚儀が成立するか否かを疑うて、非常な戀愛の爲に胸に燃え焦るゝ悶へがある。今此罪惡の凡夫なれども我全く如來の有となり如來我有となるに非ざれば眞實に安心得べくもあらず。爰に於て煩悶となる。世には失戀の結果自殺を遂行する如く、眞面目に信仰此に至れば肉の身命は物の數とも思はで只只如來の中に我を投じ全身全幅を投じて我は如來の有なりとの靈的結婚の目的を達せん爲には、云何なる事も人生只一大事のみと云ふ金剛に堅く結晶したる感情は、いかなる物を以ても換ゆることはできぬ。遙かの雲上遙かに憬れて感情の熱烈な信仰を歸命すると云ふ。益々進捗するに隨つて彌々因縁相熟して陽春の和氣に催ふされて爛漫と麗はしきを呈し香を流して華燭の禮を擧るは信仰の中心。人の信仰と如來の恩寵との親密なる關

保を融合とす。

融合と心情的信仰

宗教の中心真髓は感情の信仰殊に自己の中心と如来の如來との融合する處にあり。精神が此に安住するを以て初めて眞の安寧を得。

大我の中心と小我の中心と大小融合して親密の極に到る状態なり。此に到達する順序として、初めに遙かに如来を高き空に懐かれ一心に念佛し戀念して止まず。聖法然の我はたゞ佛にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなきと詠み給ひし如き、大宗教家の容體に對する戀愛の情の豊富なるは自然である。釋尊が自ら肉に愛すべき耶輸陀羅等を顧みず只靈界の美人舍那圓滿の靈しき聖容の見欲しさに懐れしことはあらはに經に示されねど、法華經に我滅後に於て一心に佛を見んと欲し自ら身を惜まざれば、其心の戀慕するに由つて我出でゝ爲に説法すと。是佛陀が自己の曾て靈界の遮那如来を見んと欲する情を未來の衆生が佛に對する情を汲み給ひて曰ひしにあらずや。如來と人との感情に於て融合の状態は譬へば春日和風に櫻花爛漫と麗色を呈し靄氣を流す時雄雉より放射する花粉は雌雉の子房に注入す。其當時彼等は無情ながら造化の妙用を爲す如く、先に感情の信仰として遙かに雲上の靈月に懐れ、常に一心に憶念して止まぬ阿彌陀如来眞金色圓光徹照して端正無比なるを戀念し、念々不捨の稱名は我らが罪惡も彼の慈愛の暖かなる靈氣に溶解せられて、我らが愛念の情は大なる如来の慈悲の懐に容るゝところとなりて何時かは隔ての雲排けて如来の慈顔に接し、すべて我は融けて如来の大我に合す。こゝぞ悉達太子が最愛の妻を顧みず三昧の床に入りて遮那圓滿の月の容に接し、彼の大我の如来と三密融合し、我は汝の有、汝は我有と宇宙最奥の大白在者とな我々入の境に入つて、自受法樂を受けたる心情を如来十佛の自境界と爲す。

小乘佛教の釋尊は人格としては立派なれども宗教的理想の内容を表明してをらぬ。

宇宙大靈の靈的人格現なる盧遮那圓滿の相好を客體化して、それとの入我々入の神秘的の心理を語つてをらぬ。

大乘圓滿の經華嚴は釋尊正覺を成じ七日の間華嚴三昧に入つて遮那圓滿の如来は方に蓮華臺に坐して普く法身大菩薩の爲に佗受法樂を與へ給ふを釋尊は見給ふ。其華嚴三昧の釋尊の心靈界に現はれたる遮那如来である。釋尊の神秘的關係を示されてをる。

韋提希夫人が金剛の志を發して、歸命信賴の心を照し見て、釋尊は初日觀想より願を経て彌陀如来に接せしめられた。

釋尊が夫人に語り給ふ時に、無量壽佛空中に住立し給ふ。觀音勢至二大士左右に侍立し、光明熾盛にして具さに見るべからず、百千の金色も比とすることを得ず。此時に彌陀の慈悲の心は韋提希の心を融し、韋提希の心は彌陀の中に融け込んで、心に大歡喜を生じて、未曾有と歎じて廓然大悟して無生忍を得たりと。

韋提希夫人は幽閉せられかくの如き禍厄の中に在りながら、神は歡喜無生を得れば、もはや昨日の如きの憂悲苦惱は解脱したるや必せり。是念佛三昧の妙果なり。

喻に植物が爛漫と花開く時に雌雄の交感を爲して新しき子の生命が發生する如く、神人交感の神秘的關係を以て靈的信念は生れて眞の佛子と成る。楞嚴經には此交感の心理状態を表せり。神人融合靈感不思議を感ずる靈胎が娠み新しき生命と生れ來る我は如来の有にして如来は我有との實感はこゝに於て成立す。

安住

情の信仰已に如来融合が心の花とすれば安住は結果である。融合の靈感微妙の快樂は麗しい花が馥香を放つて、我は如来の有との自信は建立された。我は如来を離るるなき靈で、靈の生命は如来の大我中に安立しての生活である。已に焉に至れば身は人

界に在れども神は如来光明中に住す。如来在ます處即ち極樂涅槃界である。眞實微妙の花匂ふ處光榮と靈福の光輝く心の都である。正しく如来大我の中に住する心は世の八風の爲に動かされず、永へに安穩である。焉を諸佛の所住處とす。假令諸佛の如くに了々と四徳の莊嚴が顯現せざるも、理想は如来の大涅槃界に安住す。如来無量功徳の莊嚴する處即ち佛智不思議の境界である。必しも十萬億土の西方のみを求めずも、阿彌陀佛去此不遠である。

吾人は人間的業識を以て自分で此處を娑婆と認めて居る。若し肉眼を用ひずして佛眼を以て觀れば阿彌陀佛現に此に在ます。大經の下に釋尊が阿難らに見せしめて其時一切萬物は悉く隱覆して唯阿彌陀如来大光明が十方を照し淨土の莊嚴輝けるを見る。佛眼を以て見れば十方界悉く清淨佛土である。

心眼未だ開けざる者は、只佛智の境を仰ぎて信すべし今現に我如来無所障礙の光明中大慈悲の懷に在る我なることを。

世尊は常に不動の如来中に精神が安住し給ふが故に形の上にかなる事情が有らうとも内心毫も動じ給はず。世雄佛陀は我ら衆生を自己の如くに彌陀大常樂の光明の中に安住せしめんと欲し給ふ。

精神的に彌陀の光明中に住處を得ざれば畢竟して眞に安穩は得ること能はず。願くば諸の衆生と共に釋迦の精神の常に安住し給ひし處に我らも安住せん。

情操

宇宙間に絶對的に歸命信賴して永遠に大安穩を得、釋尊と同じく彌陀に入りて眞の安立を得たる後は、我心靈は彌陀の有にて彌陀を離れて我なきなり。然る時は彌陀は我有なり。盡未來際永遠に離れなき靈的結婚である。假令無上正覺を得るとも無量壽に合一したのである。今現に此靈的生命は彌陀の有とし常に無上恩寵に愛せられ無比の慰安を與へられ焉に到つて自心を建立するものは彌陀に對する眞操である。例へば

眞婦の夫に對する如きの情操である。

我等は假令彌陀恩寵の信仰は得たりとも、此肉の煩惱の有るかぎりには胸中の惡魔動もすれば本の煩惱我の狀態に逆戻せんとす。假令根本的に本の主我放縱生活に爲らぬ迄も聖意に背きて自ら慚恥なきに至る。情操を破壊する機會數多あり。最も強敵は己を捕虜にせんとする胸中の煩惱我である。また宗教的にも種々の異教異學異見の輩ありて、神聖なる彌陀の建立したる情操を破壊せんとす。依て常に念佛して金剛の信を建て益々彌陀に對する情操を鞏固にせん。

聖善導は我等が信心の情操を建立をのべ給ふて、仰ぎ願くは一切行者等一心に唯佛語を信じて身命を顧みず決定して依行せよ。佛の捨てしめ給ふものをば即ち捨て、佛の行せしめ給ふものをば即ち行じ、佛の去らしめ給ふところをば即ち去れ。是を佛教に隨順し佛意に隨順すと名づく。是を佛願に隨順すと名づけ是を眞の佛弟子と名づく彌陀に立てたる信心の情操はいかなる事情の下にも動ぜざれ。若人ありて多く經論を引て證して生ぜずと導くといへども決定して破せられざれ。假令化佛報佛若は一若は多乃至十方に徧滿して各々光を放ちて舌を吐いて徧ねく十方に覆ふて、釋迦の教に隨て一切の凡夫が専心念佛して往生を得と云ふは此は虛妄なり定めて此事なしと云はうとも、此らの諸佛の説を聞くと雖畢竟して一念も疑退の心を生ぜざれ、只益々この信心剛的情操を建て爲に動亂せられざれと。

本有法身の大慈父は眞實に我等衆生を愛し給ふ、聖意を表はして、此世界の衆生の爲に法藏菩薩の身を以て、我等を愛する恩寵として大願を起し、一々の誓願は衆生の爲である。十八願に至心に我を信せよ。我を愛せよ。我國を望めよ、との聖旨を我等に傳へんが爲に、此世に出でまじなされ、無量の苦難を受なされしも偏へに我を愛し給ふ聖意ならずや。

實を以て大慈父の聖意を窺ふに、十方三世一切諸佛と云ふは實は唯一の慈父より分身して、親に背きて六道に流浪するを憐れみて、十方の有ゆる世界に身を分ちて出世

なされて我等が爲に慈父の子を愛する聖意を傳へんが爲である。殊に法藏の因十劫正覺の阿彌陀如來と現はれて一切諸佛に殊に超勝して深き聖意を我等に懸けなされ、我汝を愛する故に汝も亦我を愛せよと、我等を愛の光にて抱擁して、我等は彌陀の慈悲に抱擁せられて、我が無始已來頑固に固りたる心情は如來の慈愛に暖められざれば融合できぬものである。さればこそ彌陀と現はれ一切諸佛に咨嗟せられ、諸佛に勝れたる身を示されしは、我等に二心なく不動の貞操を建立せしめんが爲である。實は彌陀と現はれ諸佛と示さる大本は一本の本覺法身の彌陀なれども、我等衆生を攝取して本覺の都に還らしむる方便としては、彌陀に我等を抱擁せしめ、諸佛は其媒介者として示現なされた。人情の自然として自己の配偶者を選択する。而てより已上の者に心情の遷り易きは凡夫の性情である。依つて我等が心情に應せんとして彌陀は十方一切の國土より有ゆる善を撰び美を擇びて、眞善微妙の處に在まし、諸佛超勝の尊體と現はれて、我に無上の愛を以て迎はせ給ふ。我等が至心に信じ愛して歸命する時は大慈悲に融合せられて我等は無始の妄我は融けて靈き我とし給ふ。

竟に其心情が漸々に鞏固と成りて、竟には金剛の情操いかなる事情の下にも生命を賭しても動かぬ情操とは成りぬべし。

昭和二年十月廿八日印刷
同 三十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區若荷谷町九八
印刷人 小林 七 太郎
電話小石川一四九五

發行所

東京市小石川區水道端二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番